

1. 研究の背景と目的

多くの大学が地域と関わりをもつ活動を展開しているが、いまだに地域との間に物理的・心理的な壁がある。他の都市施設と比べて規模が大きい大学キャンパスは周辺と接する距離が長く校地境界のあり方が大学と地域の関係に直接影響する。校地境界は大学と都市の区分と接続両方の機能をもつ[1]。本研究では大学校地境界 (キャンパスエッジ) に焦点を当て、大学と地域が共生しやすいキャンパスのありかたを探る。調査対象は東北、関東の国立総合大学5校および、都内の国立単科大学5校、計10大学とする(表1)。

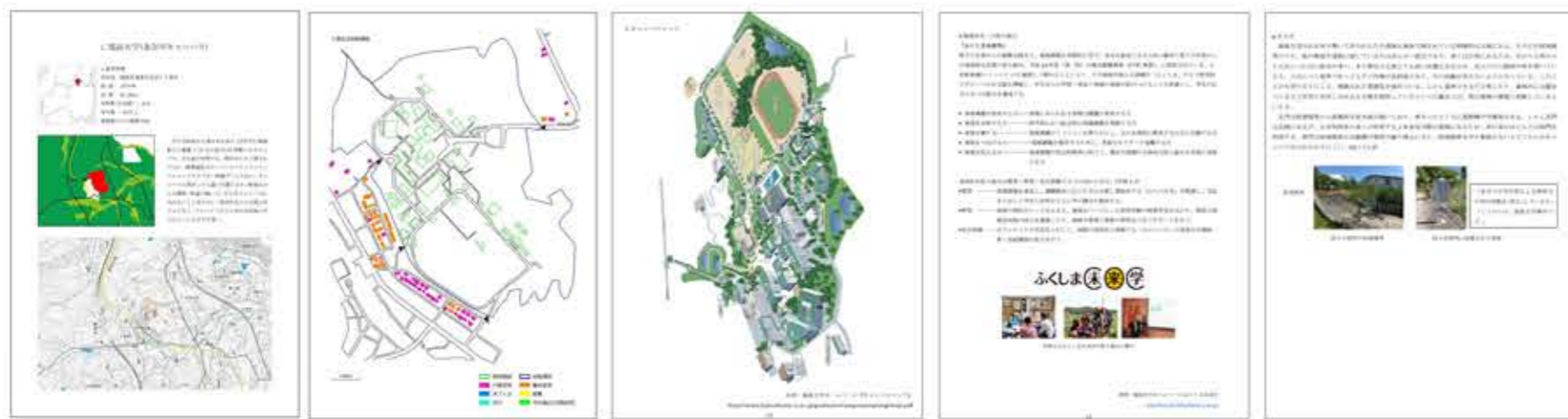
表1: 調査対象大学一覧

大学名	キャンパス	面積 (㎡)	延べ床 (㎡)	建部面積 (㎡)	容積率 (%)	建ぺい率 (%)	長さ (m)	学生数 (人)
1 福島大学	全谷川	432894	85855	23339.95	20%	5%	3317	4,378
2 宇都宮大学	峰	237263	87672	30844.19	33%	13%	1949	3,266
3 埼玉大学	大久保	305902	153418	46397.50	50%	15%	2851	8,179
4 千葉大学	西千葉	380958	203420	74732.33	53%	20%	2886	11,764
5 東京大学	本郷	561074	891000	113105.70	159%	20%	2818	25,214
6 東京医科歯科大学	湯島	45090	249646	14267.05	554%	32%	819	2,986
7 東京芸術大学	上野	69365	93634	25191.04	135%	36%	1622	2,260
8 東京海洋大学	品川	143770	61446	25067.00	43%	17%	1383	1,881
9 お茶の水女子大学	大塚	113328	84636	26357.88	75%	23%	1481	4,397
10 東京工業大学	大岡山	244,643	—	54677.49	—	22%	4080	7033

2. キャンパスエッジの調査

以下の7項目について文献調査および現地調査の結果を大学ごとにまとめた(表2)。

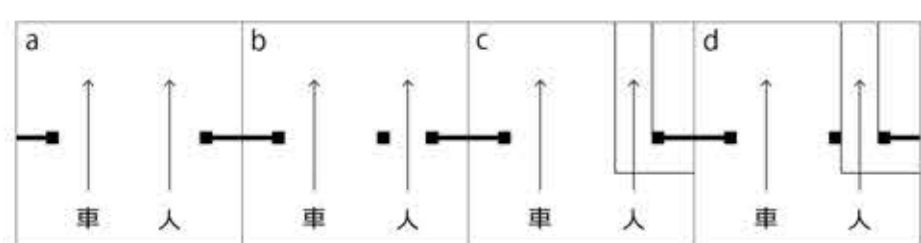
- a. 基本情報
- b. 地域共生に関する取り組み
- c. 出入口
- d. 出入口以外の境界
- e. キャンパスマップ
- f. 周辺土地利用図



例: 福島大学のデータシート

3. 調査結果とその分析と考察

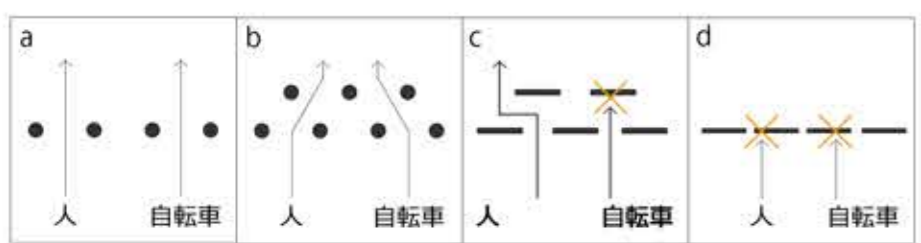
- (1) 通過できるもの
出入口を利用するのは、人、車、両方の3つ。両方が通過できるものは、4パターン。
a. 舗装も侵入口も分けない b. 侵入口だけ分ける
c. 舗装だけ分ける d. 舗装も侵入口も分ける



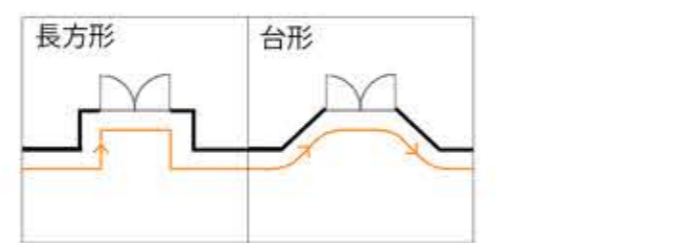
- (2) 扉の形状
開き扉、引き戸、蛇腹、複数の4種。それぞれ適した高さ、横幅、扉の収納スペースと位置が異なる。



- (3) 車止め
車止めの働きは4段階があり、適した形状と配置がある。
a. 歩道と車道を分ける b. 車の侵入を防ぐ
c. 自転車の侵入を防ぐ d. 飛び出しを防ぐ



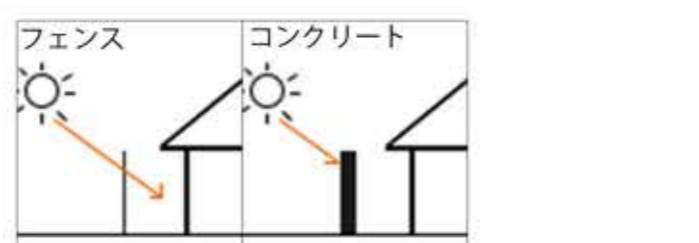
- (4) 溜まり
長方形の溜まりは動線が直角で、台形の溜まりは動線が緩やかなので足を踏み入れやすい。



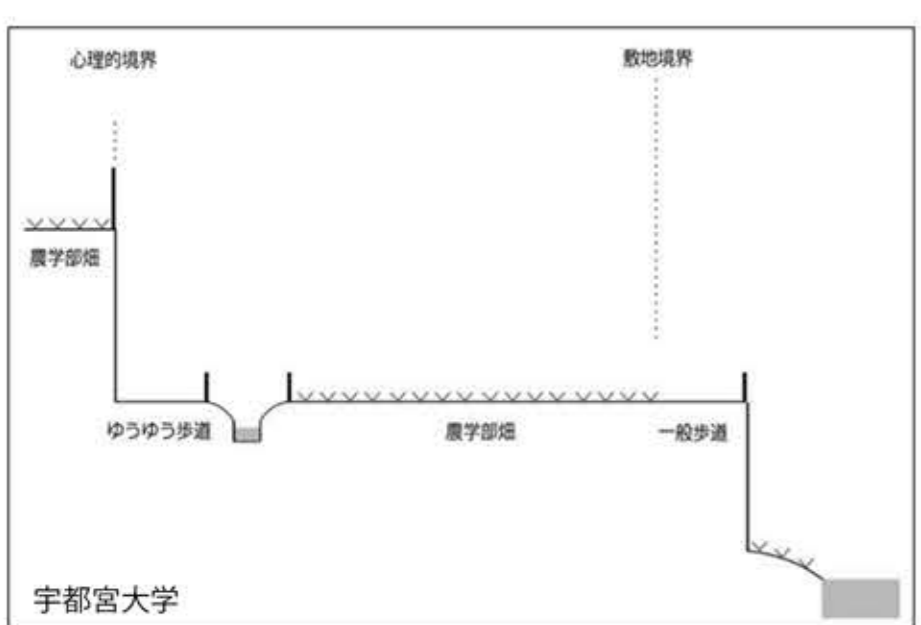
- (5) 出入口付近の構内施設
守衛室は防犯に役立つが、必要以上に入構の妨げとなることもある。出入口付近にある学外者も利用できる構内施設は交流を目的とした会館、飲食店、コンビニエンスストア、広場がある。会館は情報提供に適しているが利用しにくい雰囲気がある。飲食店やコンビニエンスストアなどが併設されていると利用しやすい。



- (6) 他の敷地に接する境界
見通しの悪い素材の方がプライバシーを守ることが出来るが、一階の採光通風の必要がある場合は見通しの良い素材を用いている。敷地間に高低差がある場合の上部は見通しの良い素材が多い。



- (8) 境界の位置
殆どの大学では敷地境界と心理的境界が一致しているため閉鎖的に感じる。心理的境界を敷地境界よりもう内側に設け、学外者に校地の一部を遊歩道や広場として提供すると大学と地域がつながりやすくなる。



- (7) グラウンドに接する境界
防球ネットとフェンス・柵の間に植栽が施してあるものが多い。大きな施設なので地域に連続した緑を提供できる場となっている。



- (9) 境界の高さ
防犯性を高めるため身長以上の高さになっている。一方、高さではなく奥行きで閉じたものは閉鎖感を軽減できる。境界のすぐ内側に斜面や建物壁面がある場合も、低い境界でよい。



- (10) 植栽
出入口は構造物の外側に植栽を施しやすい。滞留や通行の妨げになることを考えて低木などの植栽を行っていることが多い。出入口以外の境界では内側だけに施してある場合が多い。地域への貢献度が高いのは、外側に植栽が施してある境界と、見通しがよい素材を用いているので内側の植栽が見える境界である。



表2: キャンパスエッジの形質

大学	出入口	出入口以外の境界	植栽	その他
福島大学	正門	正門	フェンス	フェンス
宇都宮大学	正門	正門	フェンス	フェンス
埼玉大学	正門	正門	フェンス	フェンス
千葉大学	正門	正門	フェンス	フェンス
東京大学	正門	正門	フェンス	フェンス
東京医科歯科大学	正門	正門	フェンス	フェンス
東京芸術大学	正門	正門	フェンス	フェンス
東京海洋大学	正門	正門	フェンス	フェンス
お茶の水女子大学	正門	正門	フェンス	フェンス
東京工業大学	正門	正門	フェンス	フェンス

4. キャンパスエッジの指針に向けた知見

- 分析結果を基に、校地境界を整備する際のデザイン指針を提案する。
- 人と車の出入口は別に設けた方がよい。分けることができない場合は、両者の利用度によって侵入口と舗装の形態を変える。
 - 開き戸を用いていると大学の風格が出る。
 - 車止めは目的に合った形態、並べ方、設置位置を選ぶ。
 - 溜まりを台形にすると交流が生まれやすい。
 - 守衛室は目的に合わせて視認性を変える。
 - 出入口付近に誰でも利用できる施設を設けると学外者の入構を促進できる。カフェなど気軽に立ち寄れる施設を併設することで利用度を向上させる。
 - 他の敷地に接する境界では、隣地の用途に合わせて、プライバシーと採光通風のバランスをとる。
 - グラウンドでは防球ネットの外側に植栽を挟むことで圧迫感を和らげ、域に長い緑を提供できる。
 - 高さではなく奥行きによって侵入を防ぐことで閉鎖感を軽減できる。
 - 出入口では通行や滞留空間を優先し、低木などの植栽でもよい。出入口以外の境界で外側に植栽を施せない場合は、通しが良い素材で内側の植栽が見えるようにする。街路樹がある場合は、境界の植栽との関わり合いを意識するとより良い歩行者空間になる。

5. 結論

現在のキャンパスプランは構内での活動に意識を向け、建物の正面が内側にあることが多く、周縁部のあり方を意識しているものは少ない。しかし、地域住民が認識している大学の姿というものは、構内で行われる取り組みよりも、普段の生活で目にする校地境界であることが圧倒的に多いのである。今後大学と地域の共生を目指すならば、キャンパスの整備を行う際には、地域との関係性を考慮しながら校地境界の機能と形質も意識していかなければいけない。地域共生とは大学と地域が関わる機会を増やすだけでなく、普段の生活の中で側を通ったり、目にしたりしたときに「このまちに大学があった。」と思わせるようなまちの景観づくりや安全性の確保に貢献することも含まれることが分かった。境界は複数の要素の組み合わせでその装飾性や地域への貢献度、馴染み具合が変えられるので、大学のキャンパス計画と周辺の土地利用方を考慮してメリハリをつけることが重要である。

6. 今後の展望と課題

本研究では東北及び関東の国立大学を調査対象とした。複数の小規模なキャンパスを有する私立大学や、街と一体化したヨーロッパの大学は違った形質と機能を持っている。本研究では校地境界を外側から周回分析・考察を行ったが、内側から見る視点では違った要素が重視される可能性がある。表層的な形質だけでなく、キャンパスプランや周辺地域の都市計画などと関連付けた分析・考察を行うこと

参考文献

- [1] 日本建築学会: キャンパスマネジメントハンドブック, 日本建築学会 (2004-8)